論説

2015・5・23

全国先駆の地域医療連携

あじさいネット

地域の医療機関がそれぞれ所有する医療情報をコンピューターを活用して共有し、地域全体の医療水準を高め、高齢化社会でますます必要になる在宅医療の拡充にも結び付けようとする「地域医療ＩＣＴ（情報通信技術）ネットワーク」構築の取り組みが、全国で本格化してきた。

地域医療、在宅医療の拡充という日本の医療が直面する課題を解決するための鍵となる同ネットワーク構築。それを先駆的に実現、現在も全国最大規模を維持して「長崎モデル」として注目されているのが長崎地域医療連携ネットワークシステム協議会、通称「あじさいネット」（小尾重厚会長）だ。この素晴らしい地域の共有財産を今後も県民ぐるみで発展させ、理想の地域医療追求の拠点としたい。

地域医療ＩＣＴネットワークは、患者が最初にかかった医療機関での受診記録を、次にかかった医療機関でも、患者の同意を得た上で閲覧できるようにして医療情報の共有を図り、治療方針の迅速な確立、医療の効率化を進めようとするもの。患者が地域内のどの病院で受診しても、過去の診療歴などが時系列に沿って把握できるので、病院を変えても、一貫した治療が受けられるという画期的なメリットがある。患者がどの病院を訪ねても、そこに自分のこれまでの医療情報がそろう。すなわち、訪ねた病院が、その場で直ちに「かかりつけ医」になる、というわけである。

その全国の先駆けが「あじさいネット」で、２００４年に発足。10年を過ぎた現在、情報提供病院29、閲覧施設２４４（うち薬局44）、患者登録数約４万４千人。県内主要医療機関が参加しているので、既に全県統一ネットワークは完成している。

今後、同ネットに期待が高まるのは、在宅医療に果たす役割だ。同医療は医師と患者や家族、ケアマネジャー、歯科医師、薬剤師、看護師、ヘルパーなど、多くの職種の人が協力して進める必要がある。ここで、同ネットを利用した情報共有が多職種連携に大きく貢献しているという。

また、糖尿病など治療が遅れると重症化の恐れのある疾病、リウマチなど専門医が少ない分野の疾病などの治療でも、同ネットを活用して、専門医が適切に助言できる態勢が整備され、本県医療の標準化、高度化に貢献している。

５月上旬、長崎市で開かれた「地域医療ＩＣＴネットワークシンポジウムｉｎ長崎」には、全国から関係者が参加し、「あじさいネット」をモデルに各地域の実情に合わせて開発した医療情報連携システムが多く紹介された。長崎発の地域医療モデルが全国に広がりつつある。その本家である本県システムに、さらに磨きを掛け、全国の先頭を走り続けたい。

（高橋信雄）

2015.5.23（土）
長崎新聞（朝刊）